

020308-000-7

特53-176

垣根の姫百合

富永 徳磨/著

M39

ABI-0114

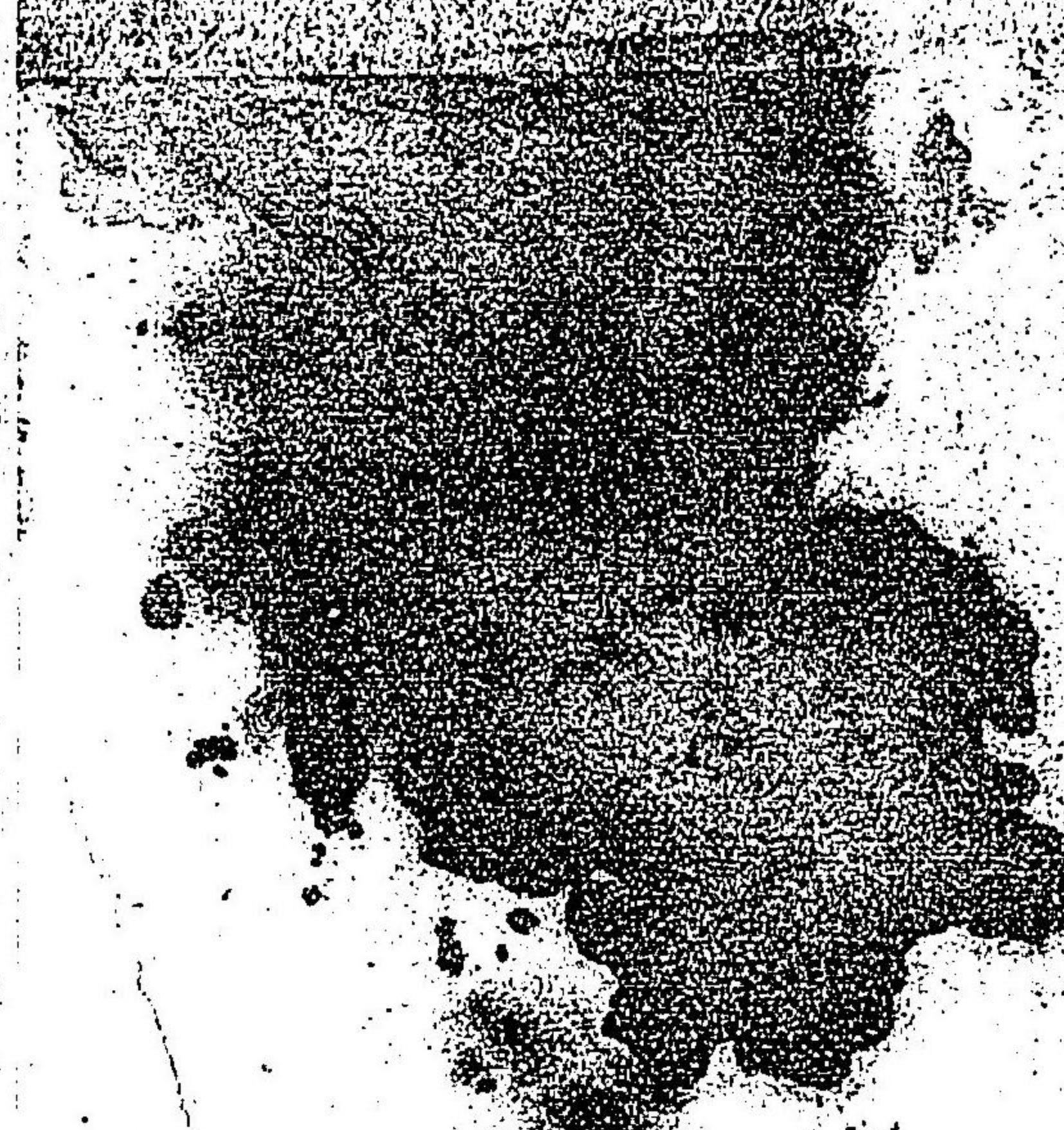
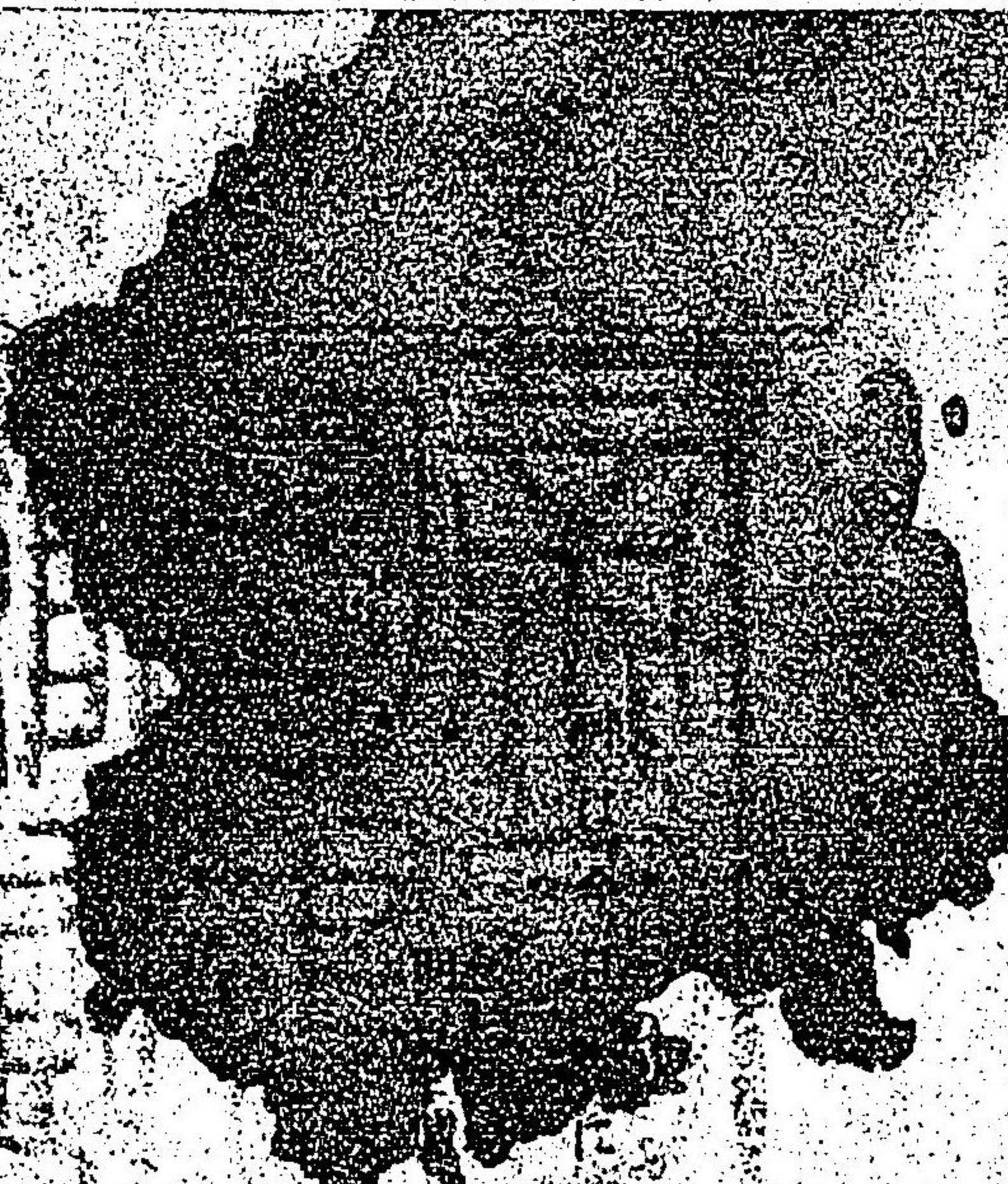




特53

176

日本郵便



にありて  
に投入い  
れらるる草をも  
かく<sup>よそ</sup>装はせ給へり

(馬太傳六〇三十一)

明治  
39 7 31  
内交



合 百 の 根 垣

巨 根 の 姫 百 合

山で、今や世に咲き誇らんとせし令嬢百合子  
 百合の花さへ尙ほ盛りなる頃、獨り先づ散  
 らして、果敢なかりし生命なるかな。  
 は決して人をして悲しましめざるなり。武夫  
 死するよりも、嬢の死は更に美はしく更に力  
 入再入の紅を増し輝きつゝ死たり、其の死は  
 實に神の恵みを證し、神の力を顯せり。兩親は永く彼と其の死とを  
 忘るゝ能はざるなり。友人もまたどこしへに彼を紀念せん、即ち相  
 計りて百合子嬢の臨終の様を記し、知人の詩歌などをも集めて之に  
 添へ此に「垣根の姫百合」を傳ふることゝなしぬ。

一 美はしの白百合  
 耶蘇きみの墓より  
 さゝやきの昔を  
 出でましゝ昔を

折 美はしの白百合

百合の花  
 百合  
 限りなきに  
 の様より  
 子を父はも  
 夢路より目さめて  
 さきいづる姿よ  
 百合しるき花野に  
 さましたまふ今なほ

(讚美歌第四百三十九)



枯れし姫百合

根垣の姫百合合

百合子さんは十六で亡くなられました。一少女のことなれば固より生前に目立つた働きをした筈もありません、然しなから其の臨終の儀に参りて、お母様をささぐ聖徒の前にも恥ぢないかと思ひます、百合さんは短い一生を最も善く終られたのです、で其の死の様こそ百合さんの唯一の最大の履歴だと言つてよろしいのであります。

百合さんが大抵、お母様に呼び寄せられて、戀しい父母の家に來られたのは、お母様の頃でした。其時はまだ微の恙もある様子もなく、お母様の家に俄に華やかさ樂しさを増したやうに見えました。私共

根垣の姫百合合

が昔々、お母様の時にも、百合さんは年の割よりはたとなしやかで、應々とお母様の御見受けして、父母はごんなにか樂しくななななと御察し、たのであります。丁度百合さんと呼ばせざる少し前の事までした、渡邊さんの御話に、『家内も實は缺かざる教會へ出るやうに致したいと言て居るのですが、躰の弱い方ゆゑ、一人では何となく心細いやうに思つて志を達しません。然し近所にいよいよ百合子さんを呼び寄せる積りですから、彼が歸つて來れば家内の世話も出來ますし、一緒に伺ふことに致しませよ』と云ふことがありました。果して百合さんが金澤へたいになつてからは、何時も母さんと連れ合つて教會へも出で、説教を聴くのに都合のよいため、人々が遠慮して着かない前の方の席を選んで、母さんを



扶けては共に腰かけて居たのは人の目に着て居ます、兎角する内に  
 クリスマスも過ぎ、少女には別けて嬉しい新年をも迎へましたが、  
 一月に入りましてから百合さんは不思議に物事を懶うがる様子が見  
 つかうつたさうです、百合さんの性分は一体物事に熱心になる方  
 でした。一二回、稽古の御世話をして上げた人も左様感したと申  
 して居ました。書物も読むことなら何時間でも倦まなかつたさうで  
 す、其の百合さんが、事を大儀かるやうになつたのです。後で思へ  
 ば此時から病魔は、身に百合さんの身の内を侵して、精力を奪ひ取  
 り居たのです。お身ものそんなこと、知る由もありませんから、  
 父母は一日、百合さんが両親の膝下に歸つて来て、志がゆる  
 んだ、と、一定懶けて居るのだと考へたので、叱つたり獎ました

りして學問を勉強させてたいで、した。所が其の月の中頃から百合  
 さんは、咳を出したのです。で感冒にでもかゝつたのだらふ  
 と思つて、近く居る御醫者に見てもらひましたが、氣管支が悪い  
 のだと言て、別に共かしくも言はないので、さほど心配もせず居  
 りましたが、サツと治療の効驗が見えず、恐ろしきまでに咳が出  
 るので、二月になり、して森島といふ内科醫を招いて見ていたとき  
 ました。此方、前とたよそ同しやうな見立てでしたが、熟ら診察し  
 て、右の肋骨の下に障りかあると言て、尙念のため略痰をも検査し  
 てくれましたが、菌も居ないといふことで、何れも重いこととは思  
 はず、只管薬を服して居ました。

日を繰つて見ると三月四日に當りますが、其日は丁度日曜で、午前



は皆さん教會に御出でになるので、百合さんも母さんと一緒に教會に行かれました。午后になりましたして、虫が知らせたといふものか、家内中が車に乗つて、公園の下の寫眞屋に行つて寫眞を取りました。此れが百合さんの最後の寫眞で、又形見の寫眞です。歸つてから心地悪いと言つて、つきました。其の後二度と床を上げることがなかつたのです。

其れから病は一向快方に向はず、だんく摸様が悪いやうなので、四月九日には更に金澤病院内科部長の山崎醫學士を聘して見ていただきました。所が驚いたことには、本人も父母も夢にも知らなかつた間に、百合さんは肺結核に罹つて、もはや快復の見込のないまですになつて居たのです。然し百合さんは此の少し前からモウ迎も助か

らないと自分では知て居たのです。百合さんが永眠された晩でした。書物の中に挿んであつた一通の手紙が見出されました。大阪の女學校で親しくして居た友人に宛たもので、チャンと切手まで貼てありましたが、送つたのか發送してなかつたのです。父さんが中を披いて見ると、彌生がばと日付がしてありまして、温い愛らしい書き振で、自分は床に臥してから二週間になりますか、今度はとても快くならないので、此世ではもう戀しい貴嬢に會ふことは出来ません。すまひと言つて、死ぬる前にモ一度あなたに會ひたいを繰り返して、生命があつたら復た御目にかゝりましやふと結んでありました。固よりモウ其の親友とも會ふことは出来ませんでした。毎日枕は重くなつて行くばかりで、外の者は唯だもう死の早いか晚いかを想ふは



かりとなりました、然し醫者も二月三月はもてさうに言ひますし、時には氣分の快いこともありまして、四月の上旬頃、さしもの北國の空も美しく晴れて、のどかなる春景色面白く名にしたふ兼六公園の櫻もちらはらと綻ひそめた頃には、午後から母さんや妹さん等と共に出かけ、公園で遊びくらし、銀行を退いて后之に加はられ、た父さんとも一緒にやつて、黄昏頃に家に歸つたこともありました、又或る天氣の好い日は市のはすれの野に出でまして、摘草をしたこともありました、百合さんは名詮自稱とでも言ふへきものか、天然を最も愛せられ、摘草などいふ遊びを最も好み、又草花を非常に愛したさうです、私どもか御病氣の中に尋ねても、枕頭に近い椽側には態々棚をこしらへて、澤山の草花の鉢が陳べてありました、百

合さんの言ふには、「私が花が好きなのものですから、父か銀行から歸りに毎日一つづつ買って歸つて下さるのです」といふことでした、木の花よりは草花が好きであり、美しい青草の野で遊ぶことが好きであつたといふ百合さんの嗜みは、床しい方といつて可いでしょう、春の若草の萌る出た時には、百合さんは病を忘れて野に出られたのです、其后また一度外に出られたことがありましたが、最後は五月二十九日で閑院宮妃殿下が、愛國婦人會支部總會へ臨御のため、御出であらせられたので、竹の園生に連なれるやんことなき御姿を拜まんとて、百合さんも御通行の路側まで出でましたが、其れよりはドツと病が篤くなりまして、急に頼み少くなりました。御兩親は疾くより基督教を信して居られました。然り百合さんの生



れない時からの信者で、百合さんは此の基督教の家庭に生み出された生れなからの基督教者でした。されば百合さんが病氣になつてからは御両親は切に其の快復を神に祈つて居ました、然し百合さんに取て何が一番幸ひであるかを両親よりも善く知ていらした神の心は其所になかつたのでした、で人間の力といふは實に弱いもの、此の一步、墓に近づき行く少女に對して何の手出しの仕様もないのを見ては、両親も唯だ萬事を善いやうにして下さる神に御任せして、どうか百合さんがいよく此世を去るのならば、信して安心して死ぬることの出来るやうにと祈るやうになりました、而して此の祈は不思議にも天父の聴き玉ふ所となりました。

御両親は常に聖書も讀んで聞かせたり、又は神様と基督とに付て色

色御話もなさつたさうです。百合さん初の中は喜んで聴いてたので、しか、中ごろ病の苦しさがますますで其方に少し氣を取られたやうでしたけれども、御両親の心尽しやら、又同じ教會の一長老の令嬢で、丁度同じ年頃の方が、久しく脊椎やら肋膜やらを患つて床に臥して居たのに、百合さんのことを聞いて非常に同情を持ち、手紙を送つて慰めたりしたとことなごで、知らずくの間、靈の内に信仰の力が加はつて居たのを見わまして、十六日にはどうか聖書の話をして頂きたいと申し出しました。渡邊氏は私へ御相談になつたので少い娘さんのことゆゑ、遠慮のない者が可からふと思つて、先づ妹を遣はしました。所が福音の力は實に驚くべく強きもので、死に頻んとして居る人の靈には、日に燬けたる礫原に水の滲入むやうに働さま



十二  
して、百合さんは非常に慰めを得、其れからと云ふものは唯だ喜びの情で一杯になり、其まで兎角嫌つて居た薬の如きも進んで用ひるやうになりました。

私はまだ其程の進歩があつたとは知らず、日曜すぎて月曜日、即ち十八日の朝に御尋ねしました所、初から喜はしうに私を迎へました。後で聴けば私の行くのを毎日待て居たのださうで、如何に福音にあてがれて居たかと思ひやられます。私もあの様に急に永眠するのであつたなら、其の前も後も、どうでも都合して毎日でも行てあげたのであつたと思ひました。其の日の百合さんの様子は實に立派で、又愛らしいものであつて、私もいたく心に印せられ、永久忘るゝことが出来ないと思ひます。百合さんの顔は少し膨れ、其れが

熱のため淡紅を呈して居て、眼元と口の邊りには微笑か滾れて居るの、まるで輝いて居るやうに見えました。然り此頃からいよく死で柩の中の花の中に眠つて居たまでの百合さんほど、清らかに牙をて居た顔は、未だ人間の顔の中に多く見たことを憶えません。舌は既に硬ばつて、談話をするには太く纏れて餘程不自由のやうでした。だが、其れを動かしては、神の恵の非常に渥いことを語り、「此度の病氣で本當に神様が自分を愛して居て下さることが分りました。然も自分は特別に恵みを受けて居ります。神様は自分のやうなものを宛から外に人の居ないやうに愛して下さいました」と言ひ、又「私の身体は毎日弱つて、痛みが激しくなつて居ます。若しも今から一週間も前に如斯だつたなら、私は其れこそ耐へ切れなかつたの



です。其れを神様は如斯に苦しくなる前に私の心に喜びを與へて下さつたものだから、今では苦くも何とも感しません』など話し、彼是二時間も神の恵を證し、私は病氣にさはりはないかと憂ふる位でした。後で渡邊さんに、『今日は父さんに御話するやうに、牧師さんに『私』の考を御話しました』と言はれたさうです。私も自分の子供から話しかけられて居たやうに感しました。百合さんは性來人情に敦く、涙脆く、思ひやりの強い方のやうに見受けました其れが最後に近づくに従つてますます顯はれたのです、病氣が重くなつてからは、御兩親が夜の目も碌に休まずして看護するのを非常に氣の毒に思ひ、仮睡して居る時などは成るだけ醒まさないやうにと心かけ、用があつても獨りで辨しやうとして、起き上

ることまでありました。銀行も決して休んで下さらぬやうに父さんへも願ひ、私の尋ねて行くのを待つ時でも、非常に氣の毒がつて居たさうです。三度の食事の如きは、自分獨りで食べるのは楽しくないと言て、死ぬる朝まで茶間まで昇り出されて、家族と一緒にしました。死ぬる四日前の晩には、梅ちゃん(直の妹さんです)を枕頭に呼んで『私が亡くなつたら、私のものは皆梅ちゃんに上げます、姉さんは父さん母さんへの御事へも、學問も何も出来なかつたから、梅ちゃんが姉さんに代つてして下さい、私の梅ちゃんに仕向けたことで、間違つたことがあつたならば赦して下さい』など、細々と遺言したさうです。そして呉服屋が來たとき、家族一同の夏着と共に百合さんの注文しやうとすれば、病氣が癒つてからにして下さい



と言ひ、近くこしらへたネルの衣も、古物にしては後で着る人が快くあるまひからと言って、手を通さずに藏つて置きました、信仰の方はますます高くなりましたして、『母さん、私ほど幸ひなものはありませんね。私が若しもあのまゝ大阪に居たならば、神様を思ふ心は餘程薄くつて、世間の人の心になつて仕舞つたでせう。又金澤に來たにしても、病氣にもならず、學校にでも出て居たら、矢張神様のことは忘れ勝ちであつたでせう。こんなに神様の御恩を感ずることの出來るのは、全く此病氣のゆるるです。だから病氣たりとて喜んで居なければなりません』とか、又は『是までは私は熱心が足らなかつたのは實に神様と教會とへ對して濟みませんから、今度快くなつたら、私は母さんを引張つて、教會へも御伴をし母さんが不熱心になら

ふとしてなれないやうに致します、其の代り私が又神様を忘れかかつたら、母さん其時は母さんが引き返して下さるのですよ』など言れたと申します。尚ほ幼年の時に洗禮を受けて居る身だから、信仰の告白をして晚餐に列れるやうにして戴きたい、又教會の女子青年會へも曾て牧師の勧めもあつたゆる入らせて頂きたい、誰からか讚美歌を歌つて聞かせて頂きたいなど申し、自分では祈りをし、讚美歌の百九十六番「海ゆくとも山ゆくとも我か魂の安み、何處にか得ん、憂きふしのみ繁き此世、何をかも堅く頼むべきや」といふを歌ひました、そして私共は至急に信仰の告白の手續などとして上げやうと思つて居た時に、百合さんは早くも世を去られたのです。實に三人の信徒の人が歌を歌つて上げやうとして訪問して來られたの



は、百合さんが永眠されて二時間ほど後のことでした、百合さんはもう神の前に信仰をめでられ、天の民等の歌に耳を澄まして居られたでせう。

二十一日の朝私はまた御尋ねして、約翰傳十章に就て、基督は我々の一人くを知り一人くを愛し玉ふこと、我々のために生命を棄て玉へること、我々の前に立をつて凡ての誘をも苦も受け玉へば、我々は唯だ後について行かは善きことなど語り、ヨブの話も致しました。此日は餘程弱つてもう、全身の骨は鳴つて痛むと言て居りましたが、其れでも苦しい顔はせず、矢張神の恵の深いことを語り、此のやうな苦みの中にも耐へることの出来るのは全く神の力であると申しました、私の別れて歸つたのが十時半頃でしたか、其れから

急に模様が悪いので、母さんが下女に命つけると、一人の下女は仕事をして居たのが濡手のまゝ飛び出して、銀行に駆けつけて渡邊さんに知らせました、渡邊さんは車を飛ばせて急いで歸つて來まして、病室の次の間の唐紙を開けると、百合さんは其の姿を一目見るや、其れは何とも言へぬ嬉しさうな顔をして、覺えず父さんと叫んださうです。幾年も會はなかつた間のやうにはろくくと涙を流し、絶りついで喜びましたが、其内に醫者も來り、其れからまた少し氣分がよくなつて、まだ死だのでもなかつたのでしたと言て笑ひまでして、下女の氣の利いたのを切りに感謝し、死でも忘れないと申しました。

然し終りは迫つたので、傍では皆が泣かじとすれと涙を押へかねて



居ますと、百合さんは却つて其れを獎まして「父さんも母さんも梅ちゃんまで皆涙を流して在つしやるのね、泣かないのは私一人だわ、何故そんなに泣くの、ナニ今に快くなりますよ。若し又私が死でも、私は善い所に行くのですから、喜んでくれさうなものだのに泣くといふのは可笑しいのね、私は先に行て、天で父さん母さんを待て居ますよ」と云ひ、身体の苦しみの激しきため、胸を撫で見ては「あく如斯ことを思ふのでなかつた、ヨブのやうでなくてはならない、基督は手足を釘で打ちつけられて在しつたではありませんか、其れも御自分のためではなくて人のためでした、其れに比へれば私の苦しみ位は何でもないのです」と語り、其れでも女らしく「ですが母さん、今は私忍ひます、今の苦は何でもないのです、けれど

もモット苦しくなつて來たら、神様を忘れはしないでしやうか、若し如其事があつたら、母さんが確りして獎まして、私の神様を忘れないやうに祈つて下さいよ」とまで、思慮深く注意して、死の川波の高く打ちかゝる時にも、飽くまで神にすがりて離れまひといふ決心でした。が、さほど心配するにも及はなかつたのです。神は決して耐へ難き試みに遭はせません、百合さんは此時には人間の受け得る苦みは極度まで受けて居たので、其上といふは無かつたのです。十二時半頃厠に行きたいと言って、母さんの肩にすがつて行きました。が、少し血も下つて苦しいやうであつたので母さんが促して床につれ歸り、横にさせると仰向に眠が如く静り懸て長い吐息を二つした様でしたが、此が其の最後の生命を吹き出したので、百合さんは微



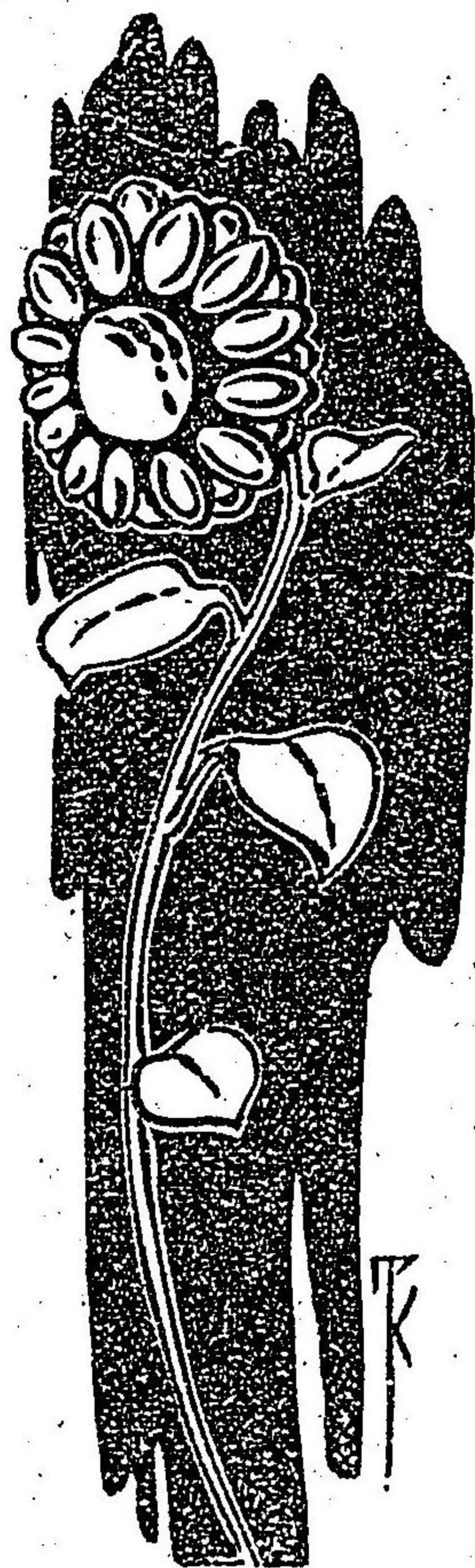
笑した顔を遺して天に上つたのでした。

人情誰か死を悼みますまひ。特に肉親の父母たり同胞たる人々に於ては堪へかたく悲いでせう。けれども百合さん自身はチツトも悲しまなかつたのです。百合さんの最後を見ては、どんな人でも永生を疑へないと思ひます。両親も自分たちが悲しんで愛嬢があれほど信して居たことを疑ふやうな事になつてはならぬと思ひ、ますます信仰を堅固にされ、天國を獲たる喜びを以て此世の悲みを包んで居られます。

二十三日午後一時半より金澤教會で葬式が行はれ、教會員や知人五十人ばかりの會葬者がありました。百合さんの遺骸は夏菊の花の燦爛たる柩の中に横たはり、父母や友人や、美しくしき花の十字架、花の

環の長い列に前後を圍まれて、泉火葬場へ送られ、斯くて塵をは塵にかへし、靈は天父の懷に歸られました。

(富永徳磨誌)





金澤教會の長老渡邊君の長女百合子の永眠につかされたまふ紀念のため垣根の姫百合てふ小冊子を編製して詩歌を集めらるる折から歌ひとつよみてよとありければよめる長うた

東京 奥野昌綱

八十四翁

いかばかり、いまはさかねの、ころもきて、さきにはふらん、ソロモンの榮華の極みの時だにも、そのよそほひは、このはなの、ひとつにしかじと、耶蘇さまが、この世にましく時よりも、めでいくしみ、たまひけん、ひめゆりのはな、いまははや、たのしきそのに、うつしうる、さかねのうち、やしなはれつゝ、

百合子淑嬢哀辭并序。

柳外渡邊先輩。頃日。喪愛兒。百合子嬢。哀傷之切。可

想。君素奉神教。造詣深甚。淑娘亦篤信。居常受持。至誠不惑。及其臥褥。一憑神聖。意如有所自安者。病已革。懺罪求福。遺囑親切。其言。皆副聖之真諦云。嗚嗟悲夫。然是自非信力勇猛。心鏡朗然者。則不能也。其享生於天庭也。必矣。余與君。有舊識。情同骨肉。且深知淑嬢。接訃痛哭。猶亡子姪。因賦此。遙致左右。聊擬解其哀悼焉。不啻傷其不幸夭折。殊稱其幼而信力精進。優獲神之冥祐也。草卉何物。妍。山丹最芳鮮。况其白而小。花咲疎離邊。艷葩欺團雪。清芬奪靈荃。欲採揉雲鬢。恐是愧金鈿。一種高潔氣。使人忘念捐。可望不可褻。看對豁心田。



## 合百姫の根垣

渡君有淑女。十五正妙年。生而慧且敏。嚴慈愛育全。命名曰百合。比花更麗娟。少小好問學。螢雪勞勤研。清才真天授。夙悟似宿緣。從爺受神教。信力一精專。稍長拜洗禮。道心確以堅。吾與君莫逆。久要擬弓弦。因茲識之子。玉鉢生紅蓮。成立已足下。往々駕西賢。其奈无妄疾。一朝侵肺肝。皓月掩陰霧。名花易凋殘。靈藥竟無驗。神醫難可痊。蘭摧而桂折。誰能不感焉。遙思父母心。哀々中心瘡。關河隔千里。聞訃涕泗漣。然皆是迷溺。不免恩愛牽。大塊多缺陷。此生元浮煙。存滅有定理。由來天命偏。所憑信念篤。靜婉且寅虔。平常至誠意。臨訣毫不愆。苟能有如此。必矣其升天。

## 合百姫の根垣

精靈歸上界。下土且永眠。遺言託懺悔。微旨中真詮。眞箇神之子。智慧如意圓。游戲弄化兒。暫時在人間。還侍帝之側。笑語通台躔。凡俗曹不曉。禍至漫憂煎。薰風吹綠樹。冲澹頗可人。垣根花又發。氷鏤而玉鑄。麗妍自仍舊。馨香月下傳。作詩洩悲痛。感極一愴然。獨坐悶難遣。對之思纏綿。賴有芳根在。灌花汲清泉。香魂或可招。妙顏恍相憐。休言幽明隔。精氣滿寰埏。誦之聊安慰。淺語費長牋。唯管爺與嬢。庶得除心愆。丙午六月於西播龍城客次

古拙隱士 近藤美敬草

百合子嬢の昇天を聞きて



神戸 和田 柑子

露清く御園に生ひし姫百合を神にさくけて庭の静けき  
ゆり子の君のみまかりたまへるよしうけたまはりて

東京 鳥山 啓

風さそふかきねのゆりのはなやさは天つみくにくにほひゆくらむ

垣根の姫百合

丹波 長谷川竹醉

姫百合の咲や垣根の草の中

哀悼詞

静岡 築瀬成一

春暖かき園のへの、  
緑色濃き姫小松、

垣根の姫百合

香氣も高さ白梅や、  
小百合一もと生ひたちぬ。  
さては千種の花のうち、

葉かげをもる旭のかげや、  
よそひこらせる百合の花。  
ゆかしの馨身にしめて、  
世のうき懊惱愁患に、

離れて高さ姿かな。  
脆きを花の性といへ、  
満開の榮はあるものを、  
一日嵐の吹きさびて、  
よみの御神の招ふかまふ、  
散りしよ、あはれ咲かずして。

世は夢とこそされどあゝ、  
二七にあまる春秋は、  
夢にもあまり短くや、  
かゝるべしとは父母の、



かけても思ひ至るべき。  
思ひぞ起す、年たつ日、  
うたうたひつれ、玉まわし、  
興せし人や今いづこ。  
君も一度、世にあらば、  
薙さぶめく初宵や、  
あふるる胸をいだかんに。  
あゝうたてなの人の世や、  
今日冷やけき、苔の下、  
神は不断の愛とこそ。  
得堪へぬ苦悶忍びつゝ、

ともに集ひてかるたとり、  
あるは羅漢の狂態を、  
松ノ緑に、蓬萊の  
銀燭の華に歡喜の、  
昨紅頬の乙女はも、  
されど嘆きそ人の子よ、  
「十字のそれに比ぶれば、

何かあるべき己が身」と、  
げにも尊く覺ゆかな。  
君逝きましましぬ、吁されど、  
榮の園に神のもと、  
幸ある日をば送るなり。  
われ寂寞の野に立ちて、  
悲胸にせまりきて、  
流星長く西に流るゝ。

垣根の姫百合に寄する

臨終の君が言の葉の、  
君が靈は永久に、  
絶わせぬ頌歌をうたひつゝ、  
在りし世の事憶ふれば、  
すぐろに仰ぐ夜の蒼穹に、

大坂 田中朝水

有明の月かも垣の百合一と根



白山の嵐に散りて百合の花

金澤の關の垣根の姫百合は枯れても千代に名を殘すらん

白妙の雪を欺く百合の花 父の御國にはふ今日かな

大坂 眞如庵其月

百合咲くや夜雨に消ゆる蟻の道

鳥羽玉の闇動かして雨の百合

姫百合や人目の關を藪垣根

大坂 清水芳吉

短夜や蒲團のり出る姉娘

合百姫の根垣

渡邊百合子葬式説教

彼を受け其の名を信ぜし者には力を賜ひて之を神の子となせり(約翰傳一〇十二)

今ここに亡骸を横たへたる渡邊百合子は満十五年に足らざること二ヶ月の間此の世に存らへたる少女なり、生者必滅の世とはいへ斯かる妙齡を以て夭折するは實に悲惨の極といふべし。父母の此の兒に付て期せし所、此の少女の自ら志せし所、悉く亡骸と共に一片の煙と消えざるを得ず。芳蕾未開に散り貴玉櫃中に碎くるの恨み豈長からざるを得んや。彼はすでに死に付て意識のなき幼兒に非ず、又精力の消耗せる老人に非ず、實に青春の處女、長き未來を望んで胸躍れるものなりき、且つ夫れ父母に愛せらるゝこと深く、彼の幸福ならんために備へらるゝ所また多かりしなり。斯かる齡かゝる境遇にあ

合百姫の根垣



る身にして、之を見棄てて露の如く消え行く、自ら愛惜と遺憾とに堪へざるべきなり、佛國の文豪ヴォルテヤ會て死に瀕せる一貴女を慰めて、死は無に歸することなり、水の面に浮へる泡の消ゆると一般のみ、決して悲しむを要せずと言ひしが、而も其の死が己れの上  
 に回り来るや、彼は憂愁やる方なく、門生に命して、速に癡狂を癒す  
 醫士を呼び來れ、然らすんは我は狂氣すべしと言ひ、終に眞に狂者となりて狂ひ死したり。一幹の筆よく世界を動かし、徒弟内外に雲の如く、名聲噴々として世界に謳はれ、座なからにして一分時に  
 一百フランの収入ある身とまでなりなから、尙満足して死に面する能はず、戀々として見苦しくも此の生にかちり付きぬ、明治の英才  
 高山林次郎も、三十にして博士の學位を得、多くの書を著はし、天

下に名を知られ、友人知己の稱讚至らざるなかりしも、また肺を病んで愈く死に迫るや、苦悶身を措く所を知らず、終に悶々から此世を去りたり。一代の學者文豪たり、識高く才溢れ、己れのを以て安心すべし眞理を發見し居たるべき人々にして斯くの如し、平凡なる匹夫匹婦に至ては死に面して更に惑ふ所恐るゝ所あるはまた是非もなき次第なりとす、ベーコンも人は小兒の暗を恐るゝが如し死を恐ると言へり、  
 然るに此に横たはれる渡邊百合子は此の妙齡の時に於ける死に對して自ら如何なる態度を取りしか、其の最後の一週間、彼は平和に充ち喜ひに溢れて終に至れり。彼の病は日に増し篤くして、其の身体は日に増し苦痛を加へ、自ら一の呼吸にも全身の骨の鳴り痛むを覺



ゆと言へり、然も其の眼と唇とは常に微笑を湛へ、其の硬くなれる舌にて神の恵を證し、自己は特に恵まれたるおとを語り、何所までも神を信じ、何所までも神に頼り、其の肉の苦みをは靈の喜ひを以て包み、其の現世の悲みをは天國の望みを以て掩ひ、却て壯者を獎ましつゝ病に堪へ、死に會したり、智者の惑ひ、學者の恐るゝ所に、此の一少女は大丈夫の如く處したり、彼をして斯くの如く美はしく死なしめし信仰の力大なるかな。

渡邊百合子は何を以て斯く美はしく死ぬるを得しか。彼は神の燃ゆるか如き愛に己か靈の包まれたるを信したればなり、神を知り、その愛に包まるゝの事實は、人間に取りて至上の幸福ならすや。之を買はんためには凡ての身代を賣りても惜しからぬなり。たとひ世界

か己れより飛び去りても之さへあらは満足すへきなり、百合子や此の幸福を獲たり。此故に世界を失ふ瞬間にも言ひ知らぬ喜悅に満たさるゝを得たり。思ふに百合子の天性の優れし所は、彼をして死に先たつて此の幸福を得せしめし助となりしならん。余か短き月日の間に見し所を以てすれば、百合子は温順なる少女なりき。彼は人に従ひ、至て素直なりしか如し。其の人情に於て厚かりしは病中の言行に由ても之を知るを得べく、思ひやり深くして涙脆かりしも事實なり。斯くの如く生れ付きたる靈性が一たび目さめて神に向ふ時には、神の恵を燃ゆるが如く感せざるを得ざるなり。此を以て彼は神の愛を信するを得たり、此の信仰は彼に取りて換へ難き幸福なりければ、彼も無限の貴き寶



を得たる如く喜ひぬ。然り彼に取りての幸福は確に此れなりしなり、  
 父母も今に於ていよく明かに之を感じるならん、平素事なき時に  
 は、人が其の子のために苦心する所多くは見當違ひの方に走れり。  
 物質の幸福を興へんことのみを願ふて、今日の如き場合にも其の子  
 の持物として携へ行くことを得べし幸福のために計らざるなり。百  
 合子の父母も彼に付て種々備ふる所ありたり。然れども今となりて  
 は「昔の玉の床とても」何かせん之感に堪へざるべく、唯だ疾くに基  
 督を信して、百合子を基督信者として生れ基督信者として死ぬこと  
 を得しめしを感謝するの外なかるべし。  
 吾人々類は一樣に此の幸福喜悅を得ざるべからず、抑も人生の歸趣  
 は神の懐なり。吾人は神より出で來れるものなれば、凡ての迷を去

り、凡ての罪を棄て、心を改め、生れ更りて、神の子供たる地位に  
 歸り、神と同心一体となり、此に神生くる限り、彼と共に永へに生  
 くるものとならざるべからず、我等の一生の苦勞は皆な此の大目的  
 を指せるものならざるべからず、教育を受くるも單に物事を多く知  
 るために非ず。物事を多く知るは、眞理を辨へ、品格を鍛煉して、  
 此の神の子供たる光榮に達せんかためのみ、學者も學んで之に達し、  
 無學者も教へられて之に達すへし。然も學者却て愚者となり、赤兒  
 却て之に達するこそ不思議なれ、而して百合子や實に之に達せり。  
 學者の達し能はざる所に達せり、其の短命を惜むなかれ、其の夭折  
 を悲むなかれ、彼は此世に於ては見るべきの事跡を遺さざりしと雖  
 も、其の死は實に聖徒に似し死なりき、ステパノが石にて打ち殺さ



れし時、天の寶坐に耶蘇の立てるを見、天の使の如く輝ける顔を以て死しといへり。百合子の生涯や殉教者の如く大ならざりしと雖も信して喜び、勇んで天に駆け上りしに至ては相同し。彼は神の子供たる地位に歸り、神の愛の的となり、八方より愛を注がれつゝあるを自覺し、自ら又美しくしき心を以て死にたり、此れ人の達すべからざる所に達せしものなれば、其の短くして人目に立たざりし一生は實に甲斐ある一生たりしなり。嬰兒の如きものを最も大いなる者とせらるゝ神の國にては、彼は決していと小さき者にあらず。クールソン、ケルナハンといふ人の小著に、人の永眠の時の状を書きて、此の世界は彼の周圍より一時に引き去り、四面全く暗黒となりぬ、やがて微かに人の聲きこえ、美妙の音楽鳴りひびき、小兒の

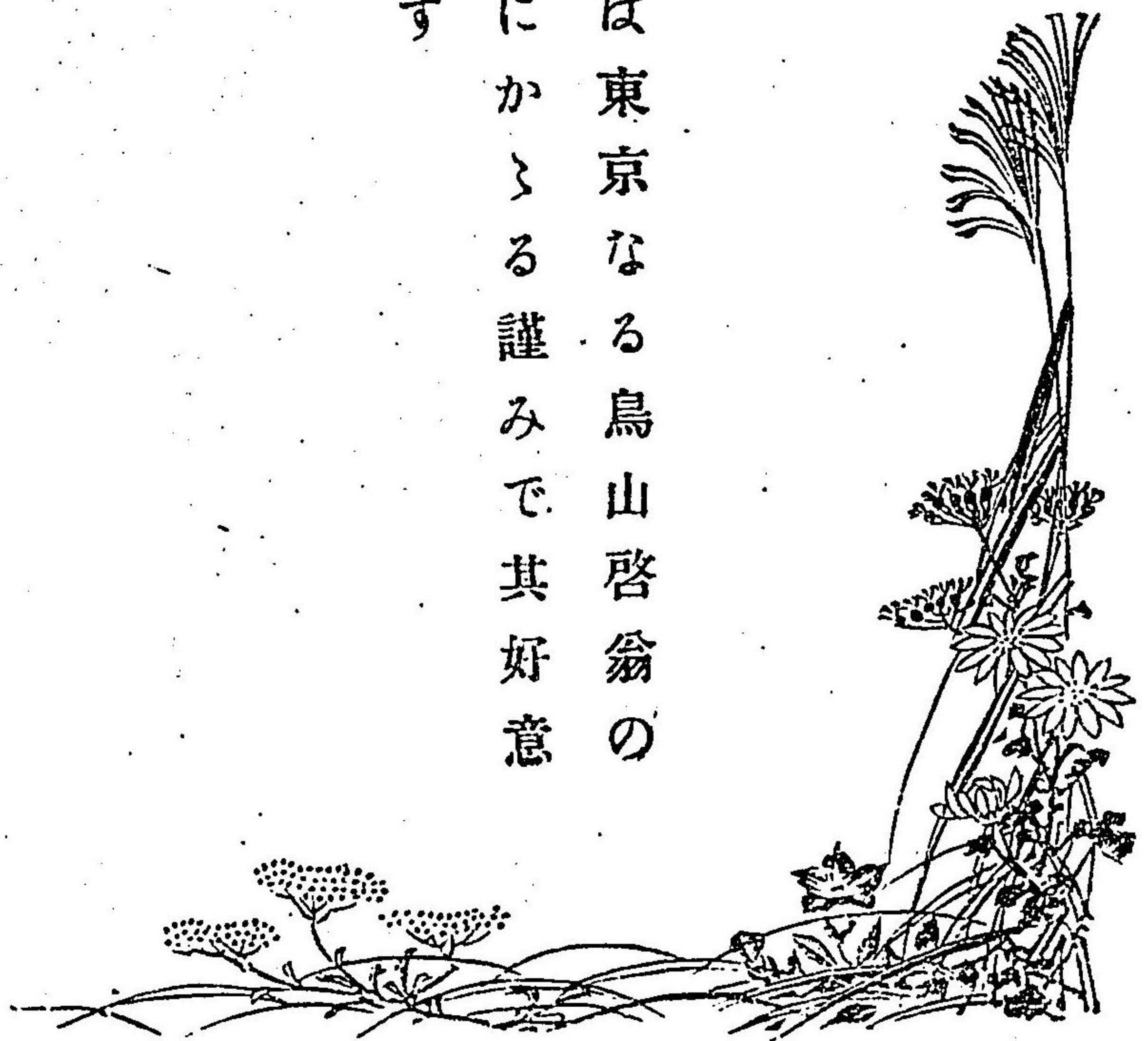
笑ふ聲も聞え、薔薇の香ゆかしく、光明の世界となりしにぞ、目を見開けば、四邊の美しくし言はん方なく、即ち天國に目さめしなりと言ふ條あり、百合子や今此の柩の内、花の中に埋もれて笑つて眠れり、彼は天の園の中にて永に枯れぬ花の中に目さめてあらん。昨年十二月大阪より父母の家に呼び歸されし彼は、今回更に天の父の家に呼び上されぬ、彼は此の世の戸を後にして閉ちて神の家に上り行き我等の目より神の中に藏れたり。父母親族は最も確實安全なる所に百合子を托したりと言ふへし、神の許の出でんとき、皆な上り行きて彼の笑顔に迎へらるべきなり。

(明治三十九年六月二十三日、日本基督教會金澤教會に於て)

牧師 富永徳磨 述



表紙は東京なる鳥山啓翁の  
揮毫にかゝる謹みで其好意  
を謝す



明治三十九年七月二十二日印刷  
同年同月二十六日發行

(非賣品)

金澤市廣坂通三十一番地

印發行  
者兼

澤田助太郎

金澤市高岡町九十番地

印刷所

明治印刷株式會社

(電話二十九番)



R-07